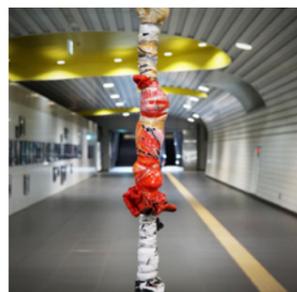


15 三枝 聡

さくさく・さとし | 東京造形大卒(成田克彦、稲葉治夫に学ぶ)。ギャラリーQ、ルナミギャラリー、不二画廊、ギャラリーLARA、ランチパッドギャラリーにて個展。LAのレイドプロジェクト、マークモアギャラリー、トランス美術館、ギャラリーJAUSで、グループ展・2人展に参加。本年6月19日～29日横浜・ギャルリーパリーにて個展開催予定。



“MATERIAL LOVE” 資本主義の終わりに。私が作品の素材として使うPVC(塩化ビニル)は、1931年にドイツで開発され、工業化が進むにつれ様々なモノに使用された。まさに物質文明を象徴する素材だ。私は素材のモノとしての独自性をリスペクトし、アートに昇華する実験的な作品を手がけている。



16 星蚕蜂苔

(セイサンホウタイ)ほしかいこはちごけ

メンバー:

Yushi Dangami, Lisa Bayne, Aaron Sheppard, Kazuki Fujiwara, shinzo okuoka

團上祐志:1995年生まれ武蔵野美術大学油絵学科卒業。クマ財団2期奨学生。在学中に渡米し展示活動の幅を広げる。帰国後起業、愛媛県大洲市の歴史的建造物でのAIR事業を展開。西日本豪雨復興アートプロジェクト「two-by-two」雲孫財団雲孫ハウスでの滞在制作を通じ、油彩から蜜蝋、光へと移行し、題材としてNFT、環境問題に取り組む一般社団法人 beeslow 理事など、領域横断的な制作を行う。

今回BankARTでは星蚕蜂苔チームでリサーチ活動を行います。アート、バイオ、テクノロジー、ファイナンスの連なる思考の連続体から、ポストアセットへの美的で新規性のある物語を紡ぐことです。具体的にはバイオアート、NFTの仮説検証的制作を行います。



17 須永祥雍

すなが・まさやす | 幼少期は鳥取県米子市で父・叔父たちが一緒に大家族で暮らしパット制作販売業をしていました。多摩美術大学油画科専攻を混乱の中卒業し、初期はグループ展を主に横浜で発表活動をしました。具象絵画を信ずるグループに10年以上参加していました。



ご縁を頂いてこのstudioに居れることを感謝したいです。旭区の団地の建て替え問題があり、管理組合とも相談しながら、自分が色彩を主に研究してきた立場でどう貢献できるか?今回はそこに一つの焦点を当てた「個展」ということとなります。自由だから自由だ。ということは決してなく、一定の有形無形の制約が意識されているからこそ自由さを感じ求めていると思っています。



18 北沢 雄

きたざわ・ゆうき | 小学一年生の夏に原因不明の高熱を出してから記憶ができなくなり、全身ケイレンをたびたび起こして家で寝たきりで過ごしてきました。気分の良い時には本を見たり、イラストを描いたりしています。2022年1月には横浜で『ユウキとネコ展』を開催しました。



今まではA3の用紙に描いていましたが、今回は広々とした空間で少し大きな作品に挑戦してみたいと思っています。また、家の中では取り組めないような画材にも挑戦できたらと思います。以前は家と作業所を往復するだけがユウキの限られた世界でしたが、これを機会に、生きる楽しみ、喜びをもっと作品に反映して欲しいです。



19 足立篤史

あだち・あつし | 1988年横須賀市生まれ。2014年東京造形大学美術学科彫刻専攻卒業、東京造形大学卒業研究・卒業制作展「ZOKEI賞」受賞。主な展示に、個展「記憶-Kioku-」(ニューヨーク、2014)、「第1回CAF賞入選者展」(東京、2014)、「第18回岡本太郎 現代芸術賞」(川崎、2015)、「都美セレクショングループ展『紙神』」(東京、2016)、「TAMA VIVANT II 2017-ポガティブ-」(東京、2017)、「TOKYO ILLUSION」(台中、2018)、「Emerging Tokyo」(ニューヨーク、2019)等。

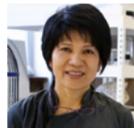


BankART KAIKOで6月10日～26日に開催される“Under 35”展示に向けた作品制作を行います。古い新聞や和紙などを使用し、空気で膨らむバルーン状の大型立体作品と、時間があれば小作品多数を期間中制作していきたいとおもいます。



20 宮森敬子

みやもり・けいこ | 横浜市出身。筑波大学大学院日本画研究科を卒業、1994年三木多聞賞受賞。1998年文化庁新進芸術家海外留学制度により米国へ派遣され、その後、フィラデルフィアとニューヨークで制作。木炭で各地の「樹拓」を和紙に転写し、自己の記憶を抽象的に表してきた。BankART AIRには、2019年より参加し、これを機に日本で発表を始めた。



今年6月と来年3月の個展の準備をしています。昨年より一日2枚、同じ場所で採集した「樹拓」をガラスケースに収納した『TIME』、戦前ハワイに生まれ、日本に嫁いだ祖母マツノに関連した、米国日系2世についての調査と、祖母の実家のあったヒロ周辺で集められた樹拓を使った仕事、その他、諸所の作業を並行して行なっています。



Photo by: Tatsuhiko Nakagawa

BankART AIR 2022 SPRING アーティストトーク

全5回、毎週金曜日19:30～21:00 会場:BankART Station
*ご参加はワンドリンクのオーダーをお願い致します。

関連プログラムとして、週末に恒例のアーティストトークを行いたいと思います。皆さまお誘い合わせの上、ご参加下さい。

- ①4/15(金) 中村恩恵プロダクション / カブ(深沢アート研究所緑化研究室) / 向井ひかり / リュウ・リン
- ②4/22(金) 伊藤キム / 三枝 聡 / 吉澤理菜 / 宮森敬子
- ③4/29(金) 関 和明 / 松本恭吾 / 須永祥雍 / 茂木敏宏
- ④5/6(金) 中田拓法 / 井口貴夫 / 青山モレ / 足立篤史
- ⑤5/13(金) 小嶋宏維 / 北沢 雄 / 星蚕蜂苔 / Romancing Gigatechs

アクセス

BankART Station
横浜市西区みなとみらい5-1
みなとみらい線「新高島駅」地下1階

お問い合わせ | BankART1929
TEL 045-663-2812
info@bankart1929.com
www.bankart1929.com



BankART AIR 2022 SPRING

OPEN STUDIO

2022.5.27 fri.—29 sun. 6.3 fri.—5 sun. 11:00—19:00

BankART Station 入場無料

リュウ・リン / 小嶋宏維 / 中村恩恵プロダクション / 向井ひかり / 松本恭吾 / 茂木敏宏 / 伊藤キム / 関 和明 / 青山モレ / カブ(深沢アート研究所 緑化研究室) / 中田拓法 / 吉澤理菜 / 井口貴夫 / Romancing Gigatechs / 三枝 聡 / 星蚕蜂苔 / 須永祥雍 / 北沢 雄 / 足立篤史 / 宮森敬子

BankART AIR 2022 SPRING OPEN STUDIO

会期:2022年5月27日[金]~29日[日] 6月3日[金]~5日[日]

時間:11:00~19:00

会場:BankART Station

入場料:無料

BankART Station では、現在20組のアーティスト達が、4月1日から約2ヶ月間、制作活動をおこなっています。基本的には、制作場所(スタジオ)の公開ですが、4月~5月に制作した成果物も発表します。是非皆様、お気軽にご参加ください。



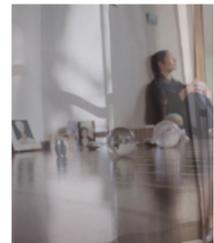
3 中村恩恵 プロダクション

なかむらめぐみぶろだくしょん|ネザerland・ダンス・シアター出身の振付家・中村恩恵の作品管理を主軸に2020年より活動を展開。「舞踊を通じて人々の心の拠り所を創造したい」という中村の想いに賛同する中村芽と中村自身で運営されている。収益金の一部をチャリティーにあてるなど社会活動の取り組みも行っている。主宰者、中村は紫綬褒章等多数の受賞歴をもつ。

プロジェクト「カナリア」Vol.1

“Hatching Thoughts”

アーティストとアートとの関係性、アーティストのアートに対する思想をめぐりサーチ、沈黙の螺旋の彼方に沈んだ物事を舞踊と言葉で捉えてゆく作品“Hatching Thoughts”に取り組む。カナリアの囀りが止んだときの静けさに、炭鉱夫が警告を聞き取ったように、口をつぐんだ人々が纏う沈黙をアートの中に昇華させてゆくことを試みたい。



4 向井ひかり

むかいひかり|モチーフとするものの構造と、その再現に用いる素材がもつ特性との重ね合わせなどにより、異素材の結集を引き起こしている。そのことを通じて、自身の身体をもって他者を眼差すこと、すなわち一つの焦点の当て方において複数のものを等しく扱い並べ直し、図にすることについて考察している。2022年3月武蔵野美術大学彫刻学科卒業。

敷き広がり記録としての線路や、前面展望の連続/速度という視点により、「鉄道」を手がかりにすることでレンズと光の直進による「風景」について考察したい。



5 松本恭吾

まつもときょうご|倉敷芸術科学大学大学院修了。日本、ドイツ、アメリカ、オランダ、チェコ、フィンランド、セルビアのアーティスト インレジデンスで制作を行い、作品を発表している。倉敷芸術科学大学、岡山理科大学非常勤講師。

美術作家として、都市に対するサーチをベースに都市空間にイタズラを仕掛け、場の持つ普段見えない側面を浮かび上がらせてきた。今回のレジデンスでは街をテーマにしながらも絵本という形式を使い、制作する。横浜と光の直進による「風景」について考察したい。



6 茂木敏宏

もてきとしひろ|1983年神奈川県生まれ。名古屋芸術大学美術文化学科卒業。主な個展に、2013年「floating images」ギャラリーヤマキファインアート、2015年「HIDDEN」ギャラリーヤマキファインアート。今まで、レストランでの展示や、音楽CDへのデザイン提供、タトゥーデザインの提供などをしております。

今まで一人の空間で黙々と制作をしてきました。今回、様々な才能のアーティストさんと同じ空間で制作することで、普段得る事の出来ない“何か”を得たいと思っております。これまで制作した事がないサイズの紙の作品。日頃スマホで制作している音楽や映像の作品。やりたいことが沢山あります。この空間で制作するのが楽しみです。



版画作品は、プレス機や紙サイズに捉われがち、かつ額縁に入れて壁にかける展示スタイルがついてまわる。これらの制約から解放されたサイズ可変の作品で、会場の規模や制限を上手く取り込みつつ、大きい所では大きく、小さい所ではコンパクトに、壁がなければ立体的に自立する、その場その時のベストな展示方法を今回のレジデンスで試みたいと思っています。

1 リュウ・リン

りゅうりん|横浜市出身。モノタイプという複製性のない版画技法を使用し、感情や思考が言葉になる前のプリミティブな状態や、言葉になりたい何かが形を取り始めるところを観察しているような感覚を表現しています。作品制作以外に、横浜・石川町にて年齢やキャリアに関係なくやる気のあるアーティストを応援するギャラリーを運営しています。



2 小嶋宏維

こじまひろゆき|1993年、東京都生まれ。近年の展覧会に個展「[de:.nós/]soco1010(東京、2022)、「さいたま国際芸術祭2020 I can speak-想像の窓辺から、岬に立つことへ」旧大宮図書館(埼玉、2020)がある。その他、アートプロジェクト『ノトコヨ 非常世』フェスティバル/トークショー 17(コンセプト・構成:ノトコヨのためのチーム、ドラマトウルク:長島確、東京、2017)等に参加。



横浜における近現代史のリサーチを行う。2016年に劇場を一国と見立て、日本から3日間独立するというプロジェクトを複数のメンバーと共に実施した。新聞やホテルなど、日本国の形成に大きく関わってきたと思われる、横浜固有の歴史を持つ装置に注目しながら、それらを用いた個人による作品の可能性と、横浜における国を作るプロジェクトの発展性の探求を試みる。

7 伊藤キム

いとうきむ|フィジカルシアターカンパニーGERO主宰。87年舞踏家・古川あずに師事。95年「伊藤キム+輝く未来」結成、国内外で活動。96年フランス・パニョレ国際振付賞、02年第一回朝日舞台芸術賞・寺山修司賞、08年横浜文化賞奨励賞。ダンス活動に加え「おやじカフェ」のプロデュースも行う。15年、言葉と身体のアンスンブルを構築するGEROを結成。



「身体と音声の多重的表現の模索」を目的に、映像での動きや音声と生身のそれとの交錯の可能性を探る。人間の発する声・言葉を変容させ、発した人間とは違った人格を持つ映像・音声として再構築し、それを複数制作。生身の伊藤キム自身の声も含む「対話」「会議」「合唱」などのようなことができないか実験を行う。



8 関和明

せきかずあき|1948年東京都生まれ。1977年早稲田大学大学院理工学研究科博士課程単位取得退学。1976年から2019年まで関東学院大学・建築学科、建築・環境学科で建築史と建築設計分野の教育を担当した。また、古代エジプトの新王国時代の王宮遺跡の発掘調査に参加して古代エジプト建築を研究してきた。横浜市の歴史的建造物保存活用事業と都市デザイン推進事業に協力している。2018年より「きたのりのまなびや@北海道東川町」プロジェクトを友人たちと進めている。



北海道上川郡東川町で計画中の「きたのりのまなびや」プロジェクトを進展させます。2022年夏に予定している現地での「小屋つくりワークショップ」の準備として、WSプログラムの立案、小屋のアイデアWS、ドローイングとモデルの作成、セルフビルド(自力建設)のためのモックアップ作成などを行います。今回のAIRの期間には、参加されたアーティストや来場者の方々に、みなさんが想う「小屋」のアイデアをお尋ねしたいと考えています。



9 青山モレ

あおやまもれ|東京都出身。大学で建築を学んだ後、編集・ライターの仕事を経て、2019年よりアーティスト活動を開始。ペンシルやチャコール、木炭などをを用いた平面作品を制作。視覚では捉えられない構造や領域、人間の感覚や思考などを空間的な表現に落とし込んだ作品を制作している。



平面の制作を通し「我々が囚われている目には見えないもの」について考察・表現していきます。キャンパスを用いての大作も制作予定です。



10 カブ

深沢アート研究所 緑化研究室
かぶ|「深沢アート研究所」を美術家山添joseph 勇と設立。緑化研究室を主宰。植物や土を通じて、人・こどもと緑をつなげるアート、インスタレーション、ビジュアルアート活動、地球の緑化活動をする。日大芸術学部美術学科卒、同校助手、University of East London 3D art dept 卒、Royal College of Art Design Interactions 中退、JICA 海外協力隊(2018~20)にて植物栽培・環境作り、Edna Manley College・Institute of Jamaica で美術教育活動。現在ジャマイカとのフェアトレード、国際協力として Mountain Top Herbs をスタート。



自然物(植物や鉱物など)を使ったエネルギーをビジュアル化する空間制作。体験してきた、地球上での1コマ1コマのストーリーを表現/制作をしたいと考えています。その1つとしてスタートした Mountain Top Herbs プロジェクトを食と現代美術 vol.8「アートと食と街」の延長として活動。来た人に向けて処方、販売、ワークショップを行いたいです。



11 中田拓法

なかたたくのり|1982年埼玉県生まれ。2014年に多摩美術大学大学院修了。主な個展に、2022年「H @ ppy Dokuro」(CRISPY EGG Gallery / 神奈川)、2019年「靈感と絵画」(GALLERY MoMo Projects / 東京)、グループ展に、2021年「WATOWA ART AWARD 2021 EXHIBITION」(elephant STUDIO / 東京)など。



フォトグラメトリを利用した、新たなリアリズム絵画の制作に挑戦したいと考えている。花瓶に生けた花を用意し、定期的に様々な角度から撮影する。その写真を元にフォトグラメトリを行うことで、多視点、多時間性を持ったオブジェクトが生成される。最終的には、生成されたオブジェクトをモチーフとして、油彩画を制作する。



12 吉澤理菜

よしざわりな|1998年新潟県長岡市生まれ。東京藝術大学油画専攻在籍。これまでの参加展示に「SQUARE The Double vol.14(リュウ・ギャラリー)」、「Anywhere but here III (前述同会場)」、「露がくぼみをうむように(小金井アーツスポット シャトー2F)」などがある。2021年度、大学内で安宅賞を受賞。



消失と存在について、スケッチを基に探っています。身近にあるものごとを考えている。花瓶に生けた花を用意し、定期的に様々な角度から撮影する。その写真を元にフォトグラメトリを行うことで、多視点、多時間性を持ったオブジェクトが生成される。最終的には、生成されたオブジェクトをモチーフとして、油彩画を制作する。



13 井口貴夫

いぐちたかお|1959年静岡県生。82年大学卒業。2000年から20年までの間活動休止。ついこの前再開した。最近の昔のスタイルにこだわらず、ギャラリーのほか旧印刷工場、廃寺、公園、塚、駐車場の屋上...等で発表してきた。私は、作品が風雨にさらされたり、「場」の空気感と擦り合わされることで作品が自立していくように感じている。



コロナ禍で人類はいく減疲弊した。さらにプーチンが仕掛けたウクライナ侵攻による殺戮は、怒りを通り越し無力感さえきた。世界は様々な分断の中にあるが、それでも何もかもがつながっている。惨禍から遠く離れた横浜の地で、私は一体何ができるのか?切れても切れても諦めずにつなげようとするのか?



14 Romancing Gigatechs

メンバー:
添石紗静、
紗野菜子、
ふるやめぐみ、
Imani,
Chloe_K,
Ryo、田中宰、橋本理恵、おおば英ゆき
2019年 IAG Awards 2019 入選、2020年 楽曲と Music Video を Apple Music, Spotify などで配信開始、2021年 長編映画「Picnic」完成上映&ライブ配信、2022年 MV「上を向いて歩こう」香港ジャズストップミュージックビデオで1位にチャートイン。
ぼくたちの仕事の半分は撮影だ。屋外で撮影する時、いつも“太陽”のことを考える。だけど、空が厚い雲に覆われると太陽は顔を出さない。「なんか小さくてもいいから太陽を作れないかな?」そうして、ぼくたちはピアノを燃やして太陽を作った。今回、陽が暮れて闇に包まれた横浜の街に太陽が出現させる。

